

優秀若手構造研究者表彰（コンクリート系）選考結果及び選評（平成 28 年度）

一般社団法人 建築研究振興協会

優秀若手構造研究者表彰選考委員会（コンクリート系）

委員長 岡 田 恒 男

1. 応募状況

標記については平成 28 年 6 月 15 日から 11 月 21 日の期間において募集したところ、3 名の応募があり、いずれも応募条件を満たすものであった。

2. 選考経過及び選考結果

受賞者の選考は、一般社団法人建築研究振興協会に設置された優秀若手構造研究者表彰選考委員会（コンクリート系）、（以下、選考委員会と略記）において次のように行った。

まず、選考委員会の開催に先立ち、各委員が応募者の申請書類、掲載論文一式を検討し、あらかじめ定めていた選考に係わる内規に従って論文の内容等に関する評価項目についての事前評価を行った。

次いで、平成 29 年 1 月 6 日に選考委員会を開催したが、公平、公正な審査を行うため、応募者の指導教員は選考に加わらないこととし、残りの委員で審議を行った。その上で各委員において事前評価点を見直し、必要に応じて修正し、応募者ごとに合計点を算出したがいずれも僅差であった。

この結果をもとに再度審議を行ったが、今回の 3 名の応募者については、3. 選評に示す通りいずれも優れた業績をあげており、研究者としての将来性も豊かであると考えられたので、以下の通り全員を表彰に値すると判断し選考した。

受賞者一覧（五十音順）在学年次は応募当時

氏 名	大学・大学院名	年次	業 績
おおつか ゆうり 大塚 悠里	明治大学大学院理工学研究科 建築学専攻博士前期課程	2年	エネルギーに立脚した応答評価と制御に関する研究
たんま あでいちや TAMMA ADITYA	千葉大学大学院工学研究科 建築・都市科学専攻博士前期課程	2年	制振ブレースを用いた超高層RC造壁フレーム構造の地震応答に関する研究
みちした りゅうたろう 道下 龍太郎	千葉大学大学院工学研究科 建築・都市科学専攻博士前期課程	2年	超高層鉄筋コンクリート造建築物の耐震性能残存率と被災度に関する研究

3. 選評

大塚 悠里君

地震時の応答評価は性能設計の根幹であり、特に塑性域での精度の高い応答評価は、構造種別を問わず継続的な課題である。大塚君は主に鉄筋コンクリート造建物を対象に、復元力特性に起因する一自由度系の応答低減係数を、定常波に対して理論的に展開し、従来の提案式に比べ精度向上が図られていることを確認した。本業績に基づき、非定常応答への応用がなされており、基礎研究として学術的意義が高いばかりでなく、耐震設計実務上も意義深い成果と認められる。

TAMMA ADITYA (タンマ アディチャ) 君

超高層 RC 造壁フレーム建物の地震時の応答低減には、コア壁を並列耐震壁として壁の間に制振部材を配置する構造が一つの有効な方法となり得る。タンマ君は、36 階建て RC 造壁フレームモデル建物を対象に、低降伏点鋼ダンパーおよび座屈拘束ブレースを用いたケースを含めた解析を実施し、それぞれの応答低減効果を評価・考察している。これまであまり研究が行われてこなかった壁フレーム構造への制振部材の適用効果を丹念に整理されており、実務に有益な成果が得られている。

道下 龍太郎君

超高層建物は、社会ストックとして災害時の影響の甚大さの点から考えて、その真の耐震性能が正確に理解される必要がある。道下君は、既存超高層鉄筋コンクリート造建物のデータベースから、建設年代の異なる 3 棟の設計例を取りあげ、非線形時刻歴地震応答解析を行なった。設計時とは異なる模擬地震動を用い、その入力倍率と損傷度合いを定量化する研究に取り組み、既存超高層建物の耐震性を理解するために有用な資料を提示しており、実務に有益な成果が得られている。

平成 28 年度優秀若手構造研究者表彰選考担当委員

岡田 恒男	東京大学	名誉教授
勅使川原正臣	名古屋大学大学院	教授
塩原 等	東京大学大学院	教授
五十田 博	京都大学	教授
楠 浩一	東京大学	准教授